

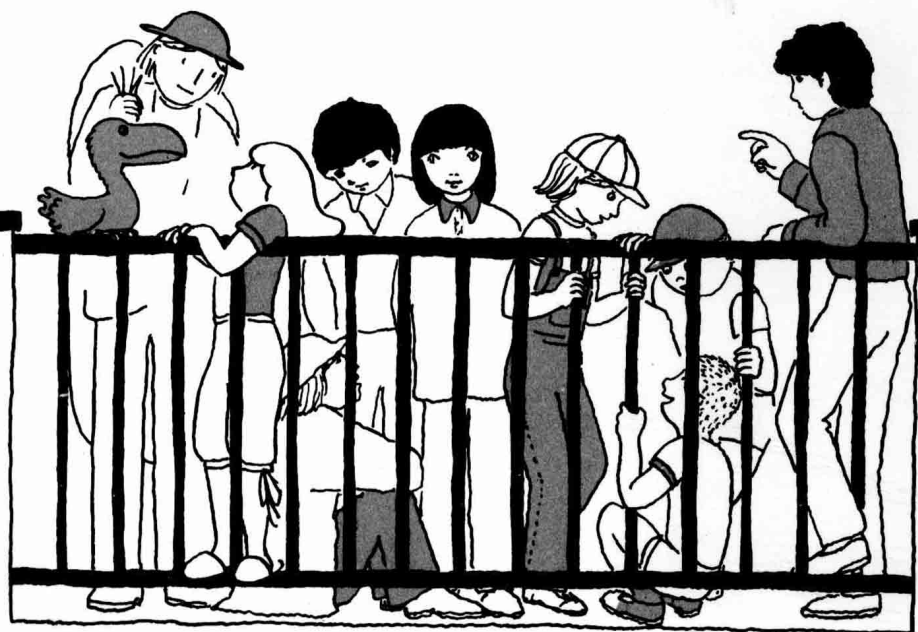
リクエストは★の話

岡田 淳 さく・え



リクエストは星の話

岡田 淳 さく・え



ほし はなし
リクエストは星の話

発行 1983年12月 1刷 1984年 4月 2刷

作者 岡田 淳

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社
〒162東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5
振替 東京5-1352番

印刷 新興印刷製本株式会社／小宮山印刷株式会社
製本 常川製本株式会社

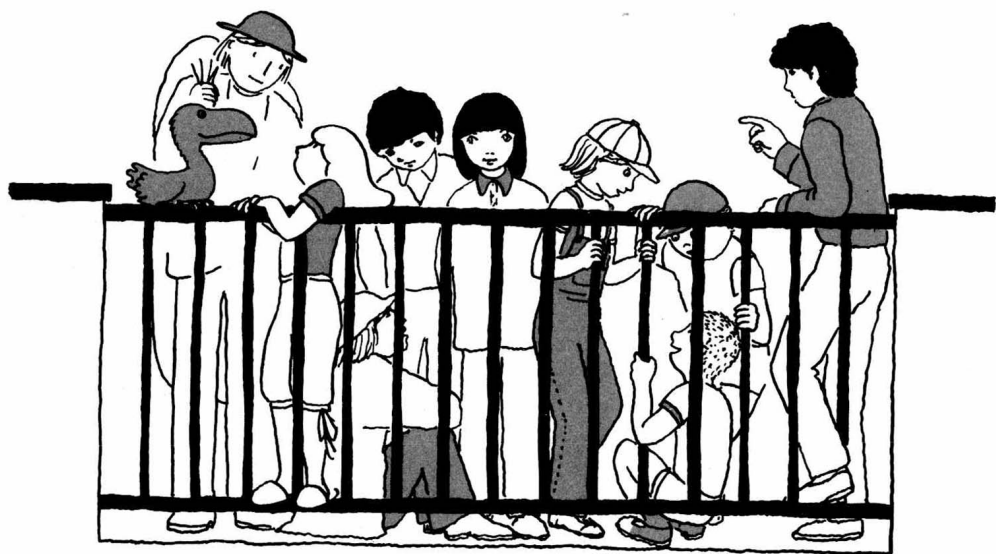
NDC 913 偕成社 146p 22cm

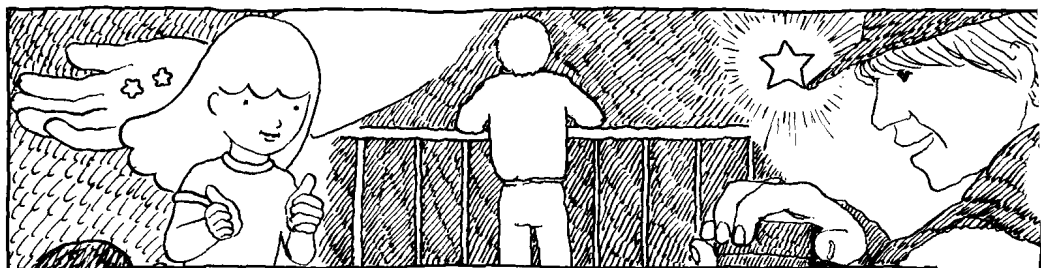
ISBN4-03-530020-9
Printed in Japan

©岡田 淳 1983
◇落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

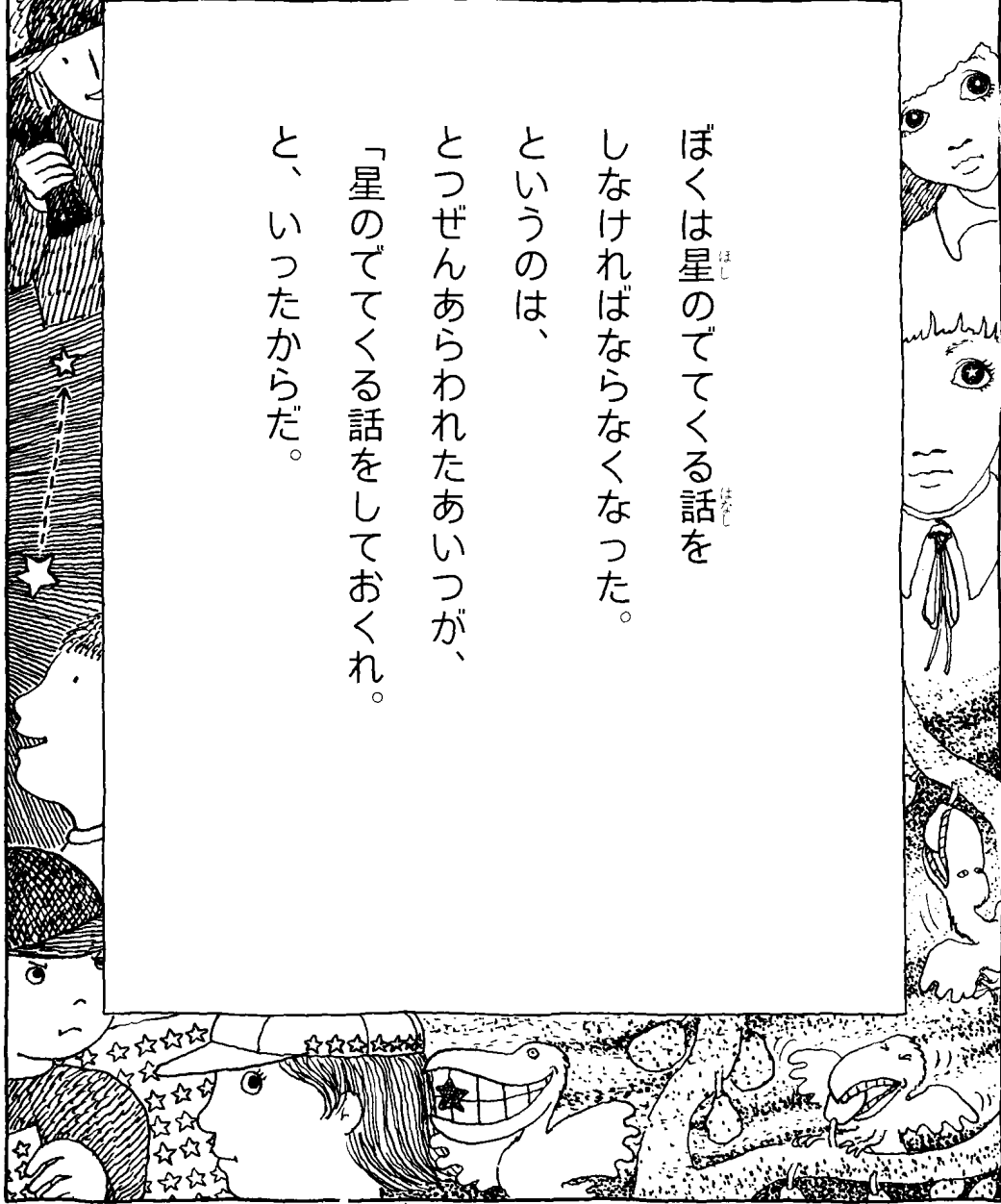
リクエストは星の話

岡田 淳 さく・え





ぼくは星^{ほし}のでてくる話^{はなし}を
しなければならなくなつた。
というのは、
とつぜんあらわれたあいつが、
「星^{ほし}のでてくる話^{はなし}をしておくれ
と、いったからだ。



リクエストは星の話●もぐじ

シールの星……6

箱のなかの星……38

ポケットの星……66

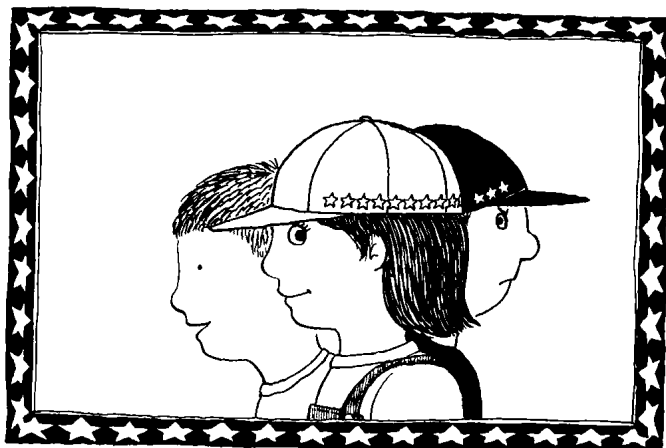


スター……108



シールの星^{ほし}

——ほんものでない星がでてくるほんとうの話



マアコが、三年生^{ねんせい}になってきゆう
に野球^{やきゅう}ぼうをかぶりだしたのは、
シールのせいだ。

三年の先生^{せんせい}は、テストで百点^{てん}を
とった子にシールをくばることにし
た。それは、銀色^{ぎんいろ}にひかる星^{ほし}の形^{かたち}の
シールで、とてもすてきだった。

みんなは、シールがほしくて、
いっしょうけんめい百点^{てん}をとろうと
した。

はじめのうち、たいていの子^こはも
らったシールを下^{した}じきやふで箱^{ばこ}には

りつけていた。ところが、プロ野球選手のホームランマークをまねて、男子が野球ぼうにつけだすと、たちまちそれが、女子のあいだにまではやってしまった。そういうわけで、マアコも野球ぼうをかぶっている。

マアコのぼうしについている星は十八。

それはクラスのなかでは、おおくもすくなくもないはずだ。

いちばんたくさんかせいでいるのは則夫の三十九まい。二位が、まあことおなじ班の美子の三十八まい。たいていのテストで満点をとるふたりに一まいの差がついたのは、きょうのことだ。

といっても、美子が満点をとれなかったわけではない。いつものように、ちゃんと百点をとったのに、シールをもらえなかった。

それは、先生があたらしいルールを発表したからだ。おなじ班に0点の子がいれば、いくら百点をとってもシールはもらえない、というもの

だった。

「班はんの人は、おたがいにたすけあって、勉強べんきょうしなければだめだ。」

と、先生せんせいは説明せつめいした。やすみ時間じかんや放課後ほうかごに、わかっている人が、わからない人におしえてあげなさい、という。

マアコの班はんは四人で、マアコと美子よしこのほかには、一平いっぺいとしんちゃんがいた。

一平いっぺいは、あそびはとくいだが、テストは苦手にがてだった。それでも、三まいの星ほしをぼうしにつけている。とてもかんたんなテストがときどきあるからだ。

ところがしんちゃんは、そのかんたんなテストでも満点まんてんをとれなかった。だから、まだ一まいもシールをもらっていない。これからだって、ずっともらえないかもしれないかった。

もし先生が、いちばんニコニコしている人にシールをあげます、と
いったら、きつとしんちゃんのもの
だろう。なにしろしんちゃんはニコ
ニコマンなのだから。けれど先生は、
そんなことはいいださなかった。

そのしんちゃんが、きょうの算数
のテストで、0点をとった。

「しんちゃんのせいで、シールをも
らえなかったのよ。ひとことくらい、
あやまったらどうなのよ。」

つくえの上に、百点の答案用紙を



ひろげたまま、美子よしこはまっかな顔かおをして、しんちゃんをよこ目めでにらんだ。
「しん、あやまるこたアないよ。」

一平いっぺいが、わざと美子よしこにきこえる声で、こまったようにわらっているしんちゃんに、ささやいた。

「どうしてあやまらなくてもいいのよ。」

美子よしこは、こんどは一平をにらみつけた。

「あやまってほしけりゃ、おまえがしんに算数さんすうをおしえといてやりやよかったんじゃねえか。」

「おしえてあげようとおもっても、おしえてもらおうって気きもちのない子におしえてあげられないじゃない。この子、シールを一まいももらってないのよ。」

そのいいかたに、一平いっぺいは、むかっときた。

「なにいつてんだよ。おまえ、いままで、しんになにかおしえてやったことあんのか。いい氣になンなよ。」

「よしなさいよォ。」

マアコがとめようとしたときには、もう一平の手がのびて、美子のおでこを、くん、とゆびさきでついてしまっていた。

たったそれだけのことだった。だのに美子は、わっとなきだした。

そのあと、一平は先生のゲンコツをいっばつもらい、しんちゃんは美子ではなく一平に、

「ごめんよ。」

と、あやまった。

マアコは、そつとためいきをついた。





その日の夕ゆうがた、もう下校げこうのチャイムも鳴なって、だれもいなくなつたはずの学校がっこうに、しのびこんだ三人がいた。

マアコと、一平いつぺいと、しんちゃんだった。

ついさつき、一平としんちゃんがキャッチボールをしているところに、マアコがとおりかかったのだ。

なにげなく、もう宿題しゅくだいすませたの、

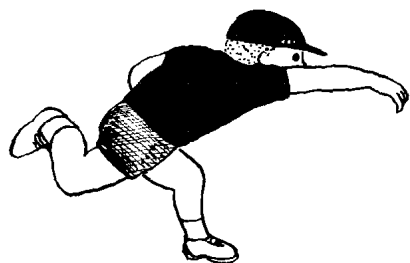
とかけた声こえに、

「ああ……夕飯ゆうはんくってからな。」

いやそうにこたえたのが一平いつぺいで、

「宿題しゅくだい……？」

と、首くびをひねったのがしんちゃんだ。おまけに、かんじんの国語こくごの



プリントを、学校がっこうにきてきたと
いう。

「とっておいでよ。」

マアコがいうと、

「ん……」

しんちゃんはしぶった。

そのときマアコは、きゆうに、

きょう学校がっこうであつたことをおもいだした。

もししんちゃんが宿題しゅくだいのプリントで満点まんてんをとったら、シールをもらえるかもしれない。そうすれば、一まいももらってないなどと、いわれなくてもすむではないか。

「いまから学校へ行って、宿題しようか。」

マアコは、自分のおもいつきに気をよくして、ふたりをさそった。

「さんねんでした。もう学校はしまってますウ。」

一平は、ボールをおもいきりたく投げあげて、話をうちきろうとした。

「ああ、そうかア……。宿題のプリントで百点とったら、しんちゃん、シールをもらえるかもしれないとおもったんだけどな……」

まあこがそういうと、とつぜん、一平のたいどがかわった。

「なるほど！　そうか。うん。いまから学校へいこう。おれ、門がしまっている、ぬけみちしってた。いこう、しん。宿題しないとだめだぞ。」

一平は、ボールをポケットにねじこむと、しんちゃんのをひっぱって、もう学校へあるきだした。そして、マアコにそつといった。